藤村琢堂画「清少納言之図」小見

A view on the tableau of Seishonagon painted by Tokudo Fujimura

若生　哲

キーワード　清少納言、紅梅、元輔、香炉峰の雪

一、はじめに

琢堂画「清少納言之図」は、春曙文庫に収める清少納言を描いた作品のうちでも、やや趣を異にする。というのは、他の作品が、所謂美人画として清少納言の想像上の面貌を大きく描くのに比べ、この作品が面貌を大きく取り上げてはない。かといって、美人画として眺めても全く他の作品に劣らないのは、卓越した絵師の力量かと思われる。相愛学園創立一〇〇周年記念『古典籍資料展示目録』（一九八八年一〇月）に紹介されたこの絵は、田中重太郎氏・鈴木弘道氏・中西健治氏の手になる『枕冊子全注釈　五』（一八五頁）にも載せられ、よく知られることとなった。『古典籍資料展示目録』の「資料　解説」に

清少納言之図　一幅

藤村琢堂筆。縦三三・五糎、横三五・六糎、清少納言の絵画といえば、枕冊子[1]二八二段「香炉峰の雪いかならむ」の条を素材にしたものが圧倒的に多い。

藤村琢堂は、箱書に「容斎門人」とあるごとく歴史人物画家として有名な菊池容斎（一七八八～一八七八）の門人で、天保四年（一八三三）尾張に生まれ、明治年間に活躍した。「丙申季秋」と画中に記しているから、明治二九年（一八九六）秋の終わりのころの作と思われる。

とあり、藤村琢堂明治二十九年九月の作である。琢堂は菊池容斎の晩年の弟子であるが、容斎について村松梢風『本朝画人傳』に、容斎が、「日本の画家が支那の史蹟のみをえがいて、かえって日本の史蹟をえがく者がないのは不思議である。同じく忠臣孝子節婦などをえがくにしても、日本の画家はなるべく日本の人物をかきたいものである。昔宮中の聖賢障子をえがくのに、みな支那の人物ばかりであるので、弁内侍がこれを慨いたというのはもっともである。」といって歴史人物図を志したことが記され、その後に故実に詳しい公卿の屋敷にも参じたという。また、『前賢故実』の功により明治天皇から「日本画師」の号を下賜され、『土佐日記』を常に愛読したという。琢堂が歴史人物画の第一人者容斎の弟子ならば、容斎が『土佐日記』をいか

に読み、絹本に筆を走らせて「土佐日記絵巻」を描いた姿をも学んだに違いない。古典を読み解き、作品に仕立てた師の姿勢が、そのまま弟子琢堂に受け継がれたとするならば、「清少納言之図」にも文学上示唆されることもあろうかと思われる。

二、琢堂画と「雪のいと高く降りたるを」の章段

清少納言が描かれる場合に、[2]二七八段「雪のいと高く降りたるを」の段が用いられるのは、出仕して間もないことにもかかわらず、最も誉れ高きことだったと解するからだろう。「御簾」と美人が描かれていると「清少納言」の絵画であるとされる所以である。

さて、琢堂画「清少納言之図」のあらましを幾つか押さえておきたい。御簾を巻き上げる立ち姿の清少納言は、御簾越しに屋外の雪の降りかかる紅梅に視線を注いでいる様子で、画面には清少納言の立ち姿が中央やや右寄りに描かれ、左手側に大きく雪の降りかかる紅梅が描かれている。巻き上げられている御簾はやや太く固げに描かれ、両端が垂れ下がることなくいかにも丈夫に描かれ、それでいて清少納言の指が御簾が重くはないように描かれいかにも仕立てのよい立派な物であることを思わせる。一方、小袿姿の清少納言の緋の袴と紅梅の赤みが画面下部を前に押し出すように描かれ、海松の単と御簾の飾り縁の青で画面の奥行きが描写され、画面が安定しているように見える。

多くの絵巻などに用いられた構図上の工夫について、比較検討する必要もあろうがここでは措くこととする。しかしながら、先にも述べた通り「面貌」を正面から描かずに美人を描くことは大和絵の基本的な姿勢に則るものと思われ、佐竹本三十六歌仙絵巻の小町、斎宮女御などの例を挙げるまでもなく、美しさがために絵師が描けない、また、描かないとする表現技法はここでも生かされている。御簾の内にその表情を隠してしまうことで美貌を表現しようとしたのである。だが、表情を隠すなら、あるいは顔を描かないとすることが主な眼目にあったなら、奥に座している定子に顔を向けさせてもよかったのではあるまいか。定子に顔も向けず、視線を屋外に向けていることに絵師の表現の眼目があるのではないかと思われてくる。これについては後述する。まず、二七八段「雪のいと高く降りたるを」の段を引く。

雪のいと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに、「少納言よ、香炉峰の雪はいかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高くあげたれば、笑はせたまふ。

人人も、「さることは知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほ、この宮の人にはさるべきなめり」といふ。

『白氏文集』第十六「香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁五首」の第四首の頷聯「遺愛寺鐘欹枕聴　香炉峰雪撥簾看」によることはよく知られ、『千載佳句』に採られたことで当時の女房たちもよく知られることになった。解釈上、清少納言が御簾を上げたことに定子がお笑いになったということに注目し、この詩句が理解の基軸になることとなることは全くゆるがない。ただ、この詩句を介して清少納言がなぜ御簾を上げたのかと言う点については、解釈に余地が残されているように思える。諸注に対して萩谷朴氏が[3]「(御簾を上げよとの仰せとは)思いもかけなかったわ」と大きく踏み込んで解釈され、古参女房たちの「反省」の言葉を付していると解釈されている一方で、田中氏『枕冊子全注釈』は「女房の負惜しみの嫉み根性をちらりと匂はした」も

のとやや控えめな見解を示しておられる。さらに、石田穣二氏[4]は「中宮のお言葉は平たく言えば『外の雪景色をながめたい』ということ、清少納言はその御要求に答えたのである。そうした要求とそれへの答えが白詩を踏まえているところに定子の後宮に特有のいわば様式がある」と、定子サロンの様式にまで言及された。先学の見解をなぞることにもなるが、この様式と定子少納言のあり様については後で触れる。

「雪のいと高く」降った時のこと、「例ならず御格子」を下ろしていた点は、いつもなら御格子を上げていたことだけれどもという常態を、「雪のいと高く降りたる」特別な時と対峙させることができる。この常態をめぐって解釈に幅が生まれ、雪の降らない常の時と理解する事もできるが、琢堂は春になったにもかかわらず「雪のいと高く降り」積もった「いつもなら御格子を上げていた」春の景色と想像したようである。それがためにわざわざ「炭櫃に火おこして」という記述がなされるというわけであろう。また、当然のこととして「例ならず御格子まゐらせて」と表現される敬意にも、この所作が女房たちの行為であったことが知られ、主の定子への心遣いであろうことが察せられる。おそらくは古参の女房たちによって、まだ春浅い時期の多くの雪まで降った寒の戻りによる冷えを防ごうとするものと理解すべきであろう。少しでも暖をとろうとすることも目的としてあったのだろうが、清少納言も含めて女房たちは「物語などして集まりさぶらふ」こととなった。古参の女房は定子の側に伺候している一方、新参の清少納言が端近く伺候していたことは想像がつく。そこに定子から清少納言を指名した上で「香炉峰の雪はいかならむ」と尋ねられたというのである。漢籍や和歌について頻繁に話題にのぼる優雅な雰囲気が定子にこうした言葉を投げかけさせるのであろうが、このような状態のときに、わざわざの指名で、「香炉峰の雪はいかならむ」と尋ねられ、御簾を掲げる機転で応えたという。神作光一氏[5]が「単純にこの一段を作者の自讃段とは解したくない」とされるように、清少納言の機知としてまとめてよいものかどうか。というのも、定子が目にする可能性があるにも関わらず自分の機転で応えたという話を書きまとめておくというのはどのようなものかと思うのである。これでは自分の自慢話を記録文書として差し出そうとしているのと変わりはない。かりにも関白道隆の娘定子に出仕が許され、今に残る文学作品をまとめあげることとなった清少納言はそのような人格の主とも思えない。新参間もない時に、主人と目も合わせられなかったような恥じらいや控えめな姿とあまりに乖離していると言わざるを得ないのである。

三、「御簾を高くあげたれば」

さて、「笑はせたまふ」という定子の所作が、清少納言の機知によるものでないとするならば、なぜ「笑う」ことになるのかについても併せて述べる必要がある。清少納言の機知を否定すると、それによるおかしみに起因する定子の「笑い」と理解していたことに再考の余地が生じるであろう。そもそも「笑い」はおかしみや滑稽さを対象とするものばかりではないので、一定の解釈はできそうである。また、「少納言よ、香炉峰の雪はいかならむ」という問いかけを文字通りに古典の知識の有無を尋ねたと理解するだけでは不十分となる。この問いかけ以前の記述内容に注目してみると、「例ならず御格子まゐらせて」の所作が女房の主人に対するものと知れる。「雪のいと高く降り

たる」状況で、いかにすべきかを熟慮した上で女房たちが「御格子まゐ」ることと判断したのだろう。こうした判断に際して、古参の女房の意見が大きく影響することはごく日常的なことだろうし、一般に、古参の者の判断は古参であるが故に経験があり、その判断に大きな狂いがなく、主人としても仕える者の奉仕に満足し、快適な生活が保証されていることとなる。古参の女房の「御格子まゐ」ることにある程度満足しているはずの定子が、自分の問いかけに直接答えなかったにせよ「御簾を高く上げ」る清少納言の所作を「笑う」ことにどのような意味があるのかと考え直す必要が生まれる。

古参の女房たちによる定子への気遣いと理解した上で、「ある程度満足しているはず」の一般的な状況を想像したが、ここでは定子がその気遣いに満足できなかった場合と理解したほうが良さそうである。というのも、古参の女房の「御格子まゐ」ることと「御簾を高く上げ」る清少納言の所作と、つまり閉めておくのか開け放つのかという点で対極にあるにもかかわらず、笑って清少納言の所作を受け入れることから、「閉めておく」ことに抵抗があったと理解しておきたいからである。こうした時、定子の立場で女房達の奉仕に満足でないことを露わにすることなどできようはずがない。主の意を酌むべき周囲の人間が、仮にも配慮として執った行動が、全く主の意に添わないことと主から申し渡されれば、仕える者として失格の烙印を押されたも同然だと思われるからである。仕える者は命令を受けるばかりでなく、主人の意を酌み、行動に移すのが然るべき姿勢であろうし、そうした仕える者を持った主人は自分に仕える者を大切に扱う責務を負うのが、あるべき主従関係だろう。主人の従者に対する気遣いと従者の立場とが看取できる部分を『源氏物語』「夕顔」[6]冒頭でみておく。

六条わたりの御忍びありきのころ、内裏よりまかでたまふ中宿に、大弐の乳母のいたくわづらひて尼になりにける、とぶらはむとて、五条なる家尋ねておはしたり。

御車入るべき門は鎖したりければ、人して惟光召させて、待たせたまひけるほど、むつかしげなる大路のさまを見わたしたまへるに、この家のかたはらに、檜垣といふもの新しうして、上は、半蔀四五間ばかりあげわたして、簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影、あまた見えてのぞく。立ちさまよふらむ下つかた思ひやるに、あながちにたけ高きここちぞする。いかなる者の集へるならむと、やうかはりておぼさる。御車もいたくやつしたまへり、前駆も追はせたまはず、誰とか知らむとうちとけたまひて、すこしさしのぞきたまへれば、門は蔀のやうなる、押しあげたる、見いれのほどなく、ものはかなき住ひを、あはれに、何処かさして、と思ほしなせば、玉の台も同じことなり。きりかけだつ物に、いと青やかなるかづらのここちよげにはひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑の眉ひらけたる。「遠方人にもの申す」と、ひとりごちたまふを、御隋身ついゐて、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ咲きはべりける」と、申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、このもかのも、あやしくうちよろぼひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに、はひまつはれたるを、「くちをしの花の契りや。一ふさ折りて参れ」とのたまへば、この押しあげたる門に入りて折る。

大弐の乳母を見舞った源氏は、場末の「五条」に何やらゆかしき「白き花」を見つけることとなるが、この「白き花」の名さえわからない

という状況、この花の名を尋ねることとなる。源氏は従者が知っていることはあるまいと思い、古今集の旋頭歌の歌句を利用して「遠方人にもの申す」と「白き花」の名を知るべく「ひとりごち」するのである。直接、随身に花の名を尋ねないのは、源氏自身も知らない花の名を随身も知らないだろうと推測し、主の問いかけに答えられないことに、随身としての資質のなさを感じさせることを避けたのであろう。「ひとりごち」たのは、随身への直接の問いかけを避けること以前に、源氏自身が自然と尋ねたくなったという気配も描こうとしたものであろうが、「立ちさまよふらむ」人々に実際に問いかけようとする声高さも避けている描きぶりである。「遠方人に」はあくまで随身にのみ聞かせるための言葉である。「白き花」の名を知ったなら、あるいはこの花の咲くところに縁でもあるのなら、それを尋ねたいものだという意志を、側近の随身に伝えるための働きかけとして源氏はひとりごちたと思われる。もちろん、古今集巻一九の贈答歌[7]、

題しらず　　よみ人しらず

うちわたすをち方人に物まうすわれそのそこにしろくさけるはなにの花ぞも

返し

春されば野べにまづさく見れどあかぬ花まひなしにただなのるべき花のななれや　　（一〇〇七・一〇〇八）

を想像してのことである。新間一美氏[8]が、夕顔巻に任氏伝の世界が用意されていると説かれた中で、「夕顔巻では、『遠方人にもの申す』という光源氏の独り言に対して、随身が『かの白く咲けるをなむ夕顔と申し侍る』と気をきかせて答えている。しかし、これは一見気をきかせているように見えて、実はそうではない。『遠方』の女性が答えるべきところを近くの男性が答えてしまっているのである。その結果、古今集のあり方からはそれた場面構成になってしまった」と指摘されたように、古今集世界だけには終わらせようとしない作者の周到な筆遣いがある。随身ならずとも、宮中の読者であれば「遠方人にもの申す」だけで古今集の歌句は想起できたであろうから、すぐさま女性に答えさせる古今集贈答歌の世界に物語をなぞることを先送りにして、随身に答えさせたのだろう。登場人物同士の接触があまりに早くなることで物語が単調にならないように工夫したともいえようが、主の独り言にいち早く随身が答えるところにも主にいかに接するべきかという女房の姿勢が活写されていると思われてならない。当然、随身は源氏が何故「ひとりごち」するような言葉を発したかということは理解し、従者を気遣う主の優しさの中で、主に守られた従者の安心感を得て、随身によって自然と「ついゐて」という動作がなされたのだろう。宮仕えする紫式部であればこそ、古今集世界の背後の任氏伝の世界を夕顔巻に昇華させる際にも、主と宮仕えする者の細やかな機微を作品世界にちりばめたと理解したい。物語世界を描くのにも、あるべき理想の主従の関係が常に念頭にあったと思われる。

さて、清少納言が「御簾を高く上げ」ることに、定子がいかにも満足げな笑いを見せるのは、こうした主従の関係が非常に強い信頼で結ばれた上でのことであろう。漢籍の素養がある母の下で育った定子であればこそ、端ぢかく伺候する清少納言に「香炉峰の雪は」と『白氏文集』の詩句を尋ねる様子を見せつつ、雪景色が見たいと遠回しに伝えることは容易なことであったろう。出仕して間もなく清少納言が端ぢかく伺候していることに、また新参の女房である清少納言を立たせ

て御簾を上げさせることに定子が目をつけたのであろう。定子が清少納言を誘導したという解釈においては先学の指摘に一致したものとなるものの、直接的な「御簾を上げよとの仰せ」というより雪景色への興味を伝える程度のものと見ておきたい。と言うのは、ようやく宮仕えになれてきた清少納言が仲間の反省の弁を書きつけたり、またその負け惜しみ根性をちらつかせる内容を定子の目に触れる可能性があるにも関わらずに、書き置くことに違和感を感ぜずにおれない。周囲の女房たちが清少納言だけを評している言葉を書き記しているととらえるのでなく、他の女房の言葉は、定子の才や気遣いに心底から宮仕えの女房たちが惚れこんでいるという讃辞が中心となっていて、清少納言ばかりでなく自分たち周囲の女房もその才や気遣いに然るべく応えることが必要なのだと述べているのだろう。また清少納言自身のとった行動についての弁として、周囲の女房の言葉という形をとりつつ、然るべき宮仕えとはこうあるべきであると、あらためて定子に見られることを意識しつつ、然るべき宮仕えを誓うような形で書き記していると理解したい。

琢堂画「清少納言之図」では清少納言が立ち上がり御簾を持ち上げる姿が描かれている。局の内で立ちあがることは一種のはしたなさをともなうものだが、新参の清少納言にさせることは古参の女房においても異議のないことであったろう。「宮にはじめてまゐりたる頃」の章段で、他の女官達が御格子を上げるなか清少納言自身が恥ずかしげに膝行する様子が見える。『弁内侍日記』[9]にも、

女房たち、袖をつらねて居並みたり。中に大宋の御屏風を立てたれども、低くて、御所へ参る人々も、あなたの公卿どもに、目を見合するもまばゆくて、昔女房のやうに、ゐざり歩きしもをかし。

と中世の作品に、中古の女房作法が見え、局の内で膝行することが常識であった女房が立ち上がらねばならない作業をするとき、新参の作業となることは想像できる。恥ずかしさのあまり顔も上げられず膝行していた清少納言が宮仕えにも慣れてきたことを描いたともとれる。また、この点、上村松園が座したまま御簾を掲げる清少納言を描いた[10]ことは、この膝行の作法を強く意識したからであろうかと思われる。

四、紅梅をめぐって

清少納言が御簾越しに眺めている景色、定子が所望したと思われる雪景色は梅花にかかる雪として描かれている。『枕草子』の中にもこれ以外に「雪」の現れる場面は多く、六十箇所以上を数える。清少納言、定子の趣向の一端がうかがわれるようにも思える。とりわけ、「木の花は」の章段のはじめに「梅の濃くも薄くも紅梅」とあることや「あてなるもの」の章段で「梅の花に雪のふりかかりたる」と見え、この図の景色に一致するのは琢堂自身が図案を枕草子本文に求めていたからではないかと思われる。

「雪のふりかかる梅花」に注目してみる。

古今集冬歌では、

ゆきのふりけるをよみける　きよはらのふかやぶ
冬ながらそらより花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

雪の木にふりかかれりけるをよめる　つらゆき
ふゆごもり思ひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける

（巻六　三三〇・三三一）

と花に見まがう雪の詠を収めた後に、

（題しらず）　（よみ人しらず）

梅花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば

この歌は、ある人のいはく、柿本人まろが歌なり

梅花にゆきのふれるをよめる　小野たかむらの朝臣

花の色は雪にまじりて見えずともかをだにほへ人のしるべく

雪のうちの梅花をよめる　きのつらゆき

梅のかのふりおける雪にまがひせばたれかことごとわきてをらまし

ゆきのふりけるを見てよめる　きのとものり

雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきてをらまし

（巻六　三三四・三三五・三三六・三三七）

と、降り積もった雪と梅香が判別しにくいという冬の内に春の兆しを喜ぶ詠とつながってゆく。こうして見ると「花に見立てる雪」「降雪に判りにくい花」から古今集の梅花が白梅を詠んでいることが理解できる。となれば、紅梅に降りかかる雪を描いたことは古今集の世界を描いたことにならず、清少納言が「あてなるもの」とした「梅の花に雪のふりかかりたる」ところの梅も、単に古今集の世界のごとき白梅としてよいのかどうか、疑わしい。花を雪に見立てる点で古今集とは逆になるが、そもそも白梅の白さと雪を比べ喩えることは万葉集に見え、小野国堅の歌に

伊母我陛邇　由岐可母不流登　弥流麻提尓　許許陁母麻我不　烏梅能波奈可毛

いもがへに　ゆきかもふると　みるまでに　ここだもまがふ　うめのはなかも

（巻五　八四八）

が見える。天平二年正月に大宰府で行われた宴で詠まれた梅花の三十二首を見ても、紅梅を詠じていると断ずることのできそうな歌はなく、紅梅が白梅同様、和歌に詠まれるようになった、あるいは都に広がるようになったのは白梅のそれとは時期がずいぶん遅れたのではあるまいか。次に「紅梅」が和歌に詠まれた例をいくつか掲げると、「拾遺集」巻第七の巻頭歌に「物名」歌として

紅梅　よみ人しらず

うぐひすのすづくる枝を折りつればこうばいかでかうまむとすらん

（三五四）

と見え、「拾遺抄」には入集してはいない。歌の良否を軽々に論ずることはできないが、勅撰歌の「物名」歌の対象としてようやく認知されたものと思われる。私家集に目を移すと、順集に

にしの宮にちひさき紅梅をうゑさせたまひたりけるを、はじめてはなさきたるとし、よろこびて、をのこどもおのおの文字ひとつをさぐりてよむうたの序、さぐりて、こもじをたまはれり、あはれ、はるのはじめ、ひむがしよりといふを、にしのみやより成りけりとは、この梅の花をみてなんおどろかれける、これより、わがおとどのきみ、やまとごとのをのこどもを、ひきつらねてさぶらはせ給ひ、から竹の笛のよろづよあそびあかさせたまひ、かかるふしをただにやは過ぐすべきとて、このこきおひいでし、よろづよのおい木にならんまでの心ばへを、よませたまふに

白浪のしらぬ身なれど大よどのおほせごとをばいかがそむかん

梅津がはこの暮よりぞながれけるうれしきせぜは見えんみなそこ

と、紅梅の花を愛でる様子が詞書に見られ、さらに能宣集には、

女の許に紅梅さしてつかはしし

なげきつつなみだにそむる花のいろのおもふほどよりうすもあるかな　（二・三）

かへし、女

うぐひすのなみだはさともなきものをいくらそめてかいろとなるらん

又、つかはしし

なげきにははるしらせじとおもひしをひとのつらきにもえにけるかな　（三五六・三五七・三五八）

と、血涙が梅の花を赤く染めた例の他にも、

春の日、客あまた知、不知まできあつまりて酒のみ侍るに、紅梅をもてあそぶとて、丹後掾曾禰好忠がかはらけとりてさし侍るとて

わがせこがそでしろたへのはなのいろをこれなむむめと今日ぞしりぬる

かへし

あさきこきいろはきらはずここはただむめはむめなるにほひとぞみる

こうばいをしろくよめる、不とくいの人のあまたまじれるによりて成るべし　（四一二・四一三）

と曾禰好忠との贈答が見え、紅梅の詠に慣れてはいない旨の左注「不とくいの人のあまた」が注目される。

もう少し「紅梅」用例を探ってみることにする。『大鏡』[11]「鶯宿梅」も「いろこくさきたる」とあり「紅梅」であることがわかる。夏山重木（重樹）が掘取った梅は「勅なればいともかしこし」[12]の和歌の巧みさから「貫之のぬしのみむすめのすむ所」の梅だと知って恥じ入るのだが、「鶯宿梅」の下地には「紅梅」の珍しさがなくては成り立たない。紀内侍が父貫之の形見の紅梅を大切にしていたのだろうか、当時としても珍種であったようである。岩波古典文学大系『大鏡』補注は、『禁秘抄』をひいて「関係があるだろうか」とされたが、「紅梅」の植樹、移植の記載の細かさにも「紅梅」の珍しさをうかがわせる。

ところで、土佐から帰京間もない時期の貫之の屏風歌に

（同じ〔承平〕七年右大臣殿屏風のうた）

紅梅のもとに女どもおりてみる

雪とのみあやまたれつつ梅花くれなゐにさへかよひけるかな　（三五八）

天慶二年四月右大将殿御屏風の歌　廿首

人の家に紅梅あり

紅に色をばかへて梅花かぞことごとにほはざりける　（三七四）

と屏風の絵として、またそれを歌材に取り上げた事が知られ、この「紅に色をばかへて」は躬恒集[13]にも見え、一方の「雪とのみ」は新千載集・春上[14]に「清原元輔」として入集している。貫之歌が「元輔」の歌として入集する例は、すでに後拾遺集[15]にもあり撰集資料の元輔集が、早くから貫之歌などを含む形になっていたと推定されている。あくまで推定にすぎないが清少納言が読み得た元輔集が、このようなものであったとするならば「紅梅」の詠は印象深い一首であったろうと思われる。

『源氏物語』になれば巻名にまで「紅梅」が表れるほど一般化する

とみてよいだろう。当時の詠としては公任集[16]の巻頭部にも「紅梅」ならびにその詠が見え、さらに『和漢朗詠集』にも「紅梅」を立項させている。その和歌は二首で

きみならでたれにかみせむむめの花いろをもかをもしるひとぞしる　友則

いろかをばおもひもいれずむめのはなつねならぬよによそへてぞみる　華山院御製

（一〇〇・一〇一）

が載せられるが、今まで見てきた紅梅の詠から察すると比較的古い紀友則の紅梅詠と、屏風歌の歌材として「紅梅」を詠むようになった時期を経て、勅撰和歌の題として「紅梅」が認知されるまでの黎明の時期の花山院の和歌が並んでいると見てよいだろうと思われる。『古今著聞集』[17]の記事を信用すると花山院出家後、横川に住しているころの作で、紅梅が広く一般に詠まれるようになった頃かと想像する。このころ元輔自身も晩年を迎えていたので、紅梅を詠んだであろうことは想像に難くない。貫之詠との重出以外に明らかな紅梅詠は見いだせないものの、後撰集撰者たちによる貫之集の検討が紅梅詠の契機となった可能性もなくはないのだろうと考えるとき、元輔やその周辺にとって「紅梅」は特別なものとなる。

ところで拾遺集に春部の歌でなく、物名として載せられる形になったのは「紅梅」の開花の早さによるのではと想像する。さきに挙げたように梅の開花の早いことは古今集の冬部、春部の梅の配置から判る。『源氏物語』「末摘花」には「白梅」「紅梅」の開花について、

日のいとうららかなるに、いつしかと霞みわたれる梢どもの、心もとなき中にも、梅はけしきばみほゝゑみわたれる、とりわきて見ゆ。階隠（はしがくし）のもとの紅梅、いと疾く咲く花にて、色づきにけり。くれなゐの花ぞあやなくうとまるゝ梅のたち枝はなつかしけれどいでや」と、あいなくうちうめかれたまふ。かかる人々の末々、いかなりけむ。

と見えるものの、必ずしも紅梅が白梅よりも開花が早いわけではないであろう。一重の紅梅の開花は早く、八重咲きの紅梅は開花も遅く、実らないのが一般的である。拾遺集が紅梅の開花を四季の配列に差し挟むことをためらうのは、古今集以来の四季の部での梅花の配列を狂わせることになるという危惧を避けたのであろう。

末摘花巻に見られるような開花の早い「紅梅」であればこそ雪積もる花としてふさわしく、紅白の取り合わせも絵師琢堂にとって画面の色彩の上からも適当なものであったにちがいない。

五、おわりに

「雪のいと高く降りたるを」の段と言えば、清少納言が機知を発揮して、御簾を掲げて、『白氏文集』の詩句の世界を具現化しているとするのが通説であるが、この通説に従えば琢堂画「清少納言之図」は理解に苦しむところがある。清少納言が屋外の雪積もる紅梅を見つめている点である。先に述べたように、清少納言が機知を発揮したのではなく、むしろ定子の機知に促されるような形で定子の屋外の景色を見たいという内なる所望を清少納言が満たした行為だとすると「さることは知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほ、この宮の人にはさるべきなめり」という周囲の讃辞も首肯できる。雪降り積もる紅梅は『枕草子』に見えないものの、後撰集撰者たちの詠

が貫之、友則といった古今集撰者の詠を受け継いでいるように見受けられ、紅梅が父元輔にとっても特別な歌題の一つであったように思われる。琢堂が紅梅を描いたことは和歌史の上での解釈に立ったものであるか否か、知るすべもないが、色彩の上で雪との取り合わせの釣り合いをとったと思ってしまうにはやや早計な感がある。

一八二段「宮にはじめてまゐりたる頃」の章段では、

いとつめたきころなれば、さし出でさせたまへる御手のはつかに見ゆるが、いみじうにほひたる薄紅梅なるは、かぎりなくめでたし

と、定子の白い手が寒さのために赤くなったところを「紅梅」に喩えている。また、仲春に着用する襲の「紅梅」は『枕草子』に頻出し、定子自身が、一〇八段「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどのことなど」の章段（長徳元年二月の記事）で、

紅梅の固紋・浮紋の御衣ども、紅のうちたる、御衣三重がうへにただ引き重ねてたてまつりたるに、

「紅梅には、濃き衣こそをかしけれ、いまは、紅梅は着でもありぬべし。されど、萌黄などのにくければ。紅にあはぬなり」とのたまはすれど、

と紅梅の御衣を好んで着していた様子がうかがえる。紅梅の襲の着用は美しく咲く八重の紅梅を意識したものかと思われる。ここでは桜などと比較して花の時期の長い紅梅であっても、やはり落花の時期ともなれば萌黄の衣の着用に迫られるのであろう。

『枕草子』に取材した琢堂が「紅梅」に定子のイメージを強く重ねているのならば、清少納言の視線が奥に向けられていないことにも理由をつけることができそうである。画中の清少納言に雪降りかかる紅梅を見つめさせるそのまなざしも、主の定子を見守る清少納言の温かな思いのシンボルと理解できるからである。

注

（1）日本古典全書『枕冊子』（朝日新聞社）によっている。

（2）以下、枕冊子本文の引用は、田中重太郎氏『枕冊子全注釈（一～四）』、田中重太郎氏・鈴木弘道氏・中西健治氏『枕冊子全注釈　五』による。

（3）新潮日本古典集成『枕草子（下）』二三一頁頭注。古参女房が定子の意向を汲めなかった意思の表れとして、「古参女房たちの反省の言葉」とあり、『枕草子解環（五）』にも継承されている。

（4）角川文庫『新版　枕草子』による。

（5）講談社学術文庫『枕草子』において、前掲の石田穣二氏の「中宮の意図は、白詩の世界をこの後宮の日常に再現することであった」を踏まえて述べられている。

（6）以下、源氏物語本文の引用は、新潮日本古典集成『源氏物語』による。

（7）新編国歌大観による。以下、和歌の引用はこれによる。

（8）新間一美氏「夕顔の誕生と漢詩文」（『源氏物語の探究　第十輯』（源氏物語探究会編　風間書房）昭和六〇年一〇月所収、のち『源氏物語と白居易の文学』（平成一五年二月　和泉書院）収載。

（9）岩佐美代子氏『弁内侍日記』（小学館　日本古典文学全集『中世日記紀行集』）による。「ゐざり」の注に「座ったままで移動する。中古の女房作法。時代が下がるにつれ、旧式で滑稽な姿と見えるようになった。」と女房作法の変遷を指摘されている。

（10）北野美術館（長野市若穂綿内）所蔵。

（11）日本古典文学大系による。

この天暦の御時に、清涼殿の御前のむめの木のかれたりしかば、もとめさせ給しに、なにがしぬしの蔵人にていますかりし時うけたまはりて、「わかき物どもは、えみしらじ。きむぢもとめ

よ」とのたまひしかば、ひと京まかりありきしかども、侍らざりしに、西京のそこ〳〵なるいゑに、いろこくさきたる木のやうたいうつくしきが侍りしを、ほりとりしかば、いゑあるじの、「木にこれゆひつけてもてまいれ」といはせ給しかば、「あるやうこそは」とて、もてまいりてさぶらひしを、「なにぞ」とて御覧へければ、女の手にてかきて侍ける、

「ちよくなればいともかしこしうぐひすのやどはと、はゞ、いかゞこたへん」とありけるに、あやしくおぼしめして、「なにものゝいへぞ」とたづねさせ給ければ、貫之のぬしのみむすめのすむ所なりけり。「遺恨のわざをもしたりけるかな」とて、あまえおはしましける。重木今生のぞくかうはこれや侍けん。さるは、「思やうなる木もてまいりたり」とてきぬかづけられたりしも、からくなりにき」とて、こまやかにわらふ。

(12)
拾遺集には

内より人の家に侍りける紅梅をほらせ給ひけるに、うぐひすのすくひて侍りければ、家あるじの女まづかくそうせさせ侍りける

531　勅なればいともかしこし鶯のやどはととはばいかがこたへむ

かくそうせさせければ、ほらずなりにけり

とあり、「大鏡」の梅を堀取ったことが作品上のデフォルメであることを示唆する。

(13)
新編国歌大観　第七巻（底本　書陵部蔵御所本）。

(14)
第二句と第五句に異同がある。

（題知らず）　清原元輔

50　雪とのみあやまたれしを梅の花紅にさへにほひぬるかな

また、私家集大成　元輔集Ⅰ（書陵部蔵定家系三十六人集）210に新千載集と同じ第二句で収められている。

(15)
後拾遺集には次の屏風歌三首が「清原元輔」となっている

天暦御時の御屏風に小鷹狩する野にたびびとのやどれるところをよめる　清原元輔

314　あきののにかりぞくれぬるをみなへしこよひばかりのやどもかさなん

天暦御時御屏風にきくをもてあそぶいへあるところをよめる　清原元輔

353　うすくこくいろぞみえけるきくのはなつゆや心をわきておくらん

天暦御時の御屏風の歌に十二月ゆきふるところをよめる　清原元輔

415　わがやどにふりしくゆきをはるにまだとしこえぬまの花とこそみれ

(16)

春しら川に殿上の人人いきたりけるに

1　春きてぞ人もとひける山里は花こそ宿のあるじなりけれ

おなじ所に紅梅うゑたりつるにはじめて花さきたるにおはしたりけるに、女御の御もとに

2　うゑしよりしたまつものを山里の花みにさそふ人のなきかな

返し

3　うゑおきし花なかりせばよもぎふを何につけてか思ひ出でまし

あめのうちに山ざとの梅を思ふといふことを

4　山ざとの梅を思ふに雨ふればただにもちらで色やまさらん

(17)
新潮日本古典集成『古今著聞集（上）』巻五によると、

花山院、紅梅の御歌の事

花山院、御ぐしおろさせ給ひて後、叡山より下らせ給ひけるに、東坂本の辺に、紅梅のいとおもしろう咲きたりけるを、立ちとどまらせ給ひて、しばし御覧ぜられけり。惟成の弁の入道、御供に候ひけるが「王位をすてて御出家ある程ならば、これ体のたはぶれたる御振舞はあるまじき御事に候ふ」と申し侍りければ、よませ給うける、

色香をば思ひもいれず梅の花つねならぬ世によそへてぞみる